

日本語アカデミックライティング支援における実践知の抽出過程 —「発想のスイッチ」を例として—

大森 優 黒田 史彦

要 旨

大学等における学習支援の一つである日本語アカデミックライティング支援 (AWS) では、書き手である日本語学習者との個別的な対話を通して、書き手が表現したいことを引き出しながら文章を改善する方法を共に考える。支援者は経験的に様々なコツを知っているが、それら暗黙知的な実践知は、なかなか言語化できない。そこで筆者らは、実践知の言語化と共有化を目指す「パターン・ランゲージ (PL)」の手法を援用し、複数の実践場面から帰納的にパターンを抽出、整理した。PL の作成手順を踏めば、実践知が言語化され、他者と共有できる形式知となる。本稿では、AWS のパターンのひとつとして抽出された「発想のスイッチ」を一例として、実際のセッション場面のどのようなやりとりに着目し重要な要素を抽出していったのか、その作成過程を詳細に記述する。

【キーワード】日本語アカデミックライティング支援 パターン・ランゲージ 実践知 言語化 抽出過程

The Process of Extracting Practical Intelligence in Japanese Academic Writing Support

OMORI Yu, KURODA Fumihiko

[Abstract] In the Japanese Academic Writing Support program (AWS), the supporter works with learners to find a way to improve their papers through individual dialogue. In this paper, the authors reveal supporters' practical intelligence in terms of "pattern language" to extract and organize AWS patterns from multiple practical situations. The authors describe the process of creating a "thinking out of the box," as one of the AWS patterns, to show how we extracted important elements by focusing on the interactions in sessions.

[Keywords] Japanese academic writing support, pattern language, practical intelligence, verbalization, the process of extracting

1. はじめに

1.1 日本語アカデミックライティング支援とその支援者が持つ実践知

日本語アカデミックライティング支援（以下、AWS）は正課外での学習サポートの一つであり、主にレポートや論文などの文章について、書き手である日本語学習者と支援者が1対1で対話を通して、より良い文章の書き方を一緒に考えるというアプローチをとる。従来のように文章を一方的に直すという添削ではなく、どのように改善していかを支援者と書き手が「対話を通して一緒に考える」ということが大きな特徴になっている。

書き手の意図や考えを引き出し、より良い書き手となってもらうために、十分な経験を積んで熟達した支援者はセッションの中で経験的に培ってきた様々なコツを駆使している。このコツは実践知と呼べるものである。楠見（2012）によると、実践知 (practical intelligence) とは、「熟達者がもつ実践に関する知性」(p.4) であり、「経験から実践の中に埋め込まれた暗黙知 (tacit knowledge) を獲得し、仕事における課題解決にその知識を適用する能力を支えている」(pp.12-13) のものであるという。日本語アカデミックライティング支援においても、一人一人の書き手や場面に応じてアプローチを使い分けるなどしながら、書き手の思考を整理し、書き手自身が主体的に考えられるような手立て、コツやノウハウといったものを熟達した支援者は個人の中に蓄えているが、こうした実践知は暗黙知的なもので、なかなか言語化されない。本人がその知の価値に気づかず、コツであると自覚していない場合もある。実際のセッションの中で各支援者が獲得し、駆使している実践知が明らかになれば、知の共有や継承が容易になり、結果的にその実践全体に好循環を促す。

1.2 実践知を記述するパターン・ランゲージ

そこで筆者らは、実践知の言語化と共有化を目指すパターン・ランゲージの手法に着目し、日本語アカデミックライティング支援者のためのパターン・ランゲージの試作に着手した（黒田・大森 2021）。

パターン・ランゲージとは、ある分野における成功事例に繰り返し見られる、経験則やコツ、知恵などの「匠の技」をパターンとして抽出し、主に言語（ランゲージ）による視覚化を施した実践知で、ある状況で起こりがちな問題と、その解決をセットにし、それを指し示す言葉すなわちパターン名を与えてまとめたものである。一つひとつのパターンはある状況に特化した解決策のヒントを与えるが、それらが集まり、体系化されたパターン・ランゲージ全体を見渡すことで、その実践全体の質をより良くすることができる（井庭 2019）。

この手法を参考に筆者らが作成した日本語アカデミックライティング支援者のための

パターン・ランゲージの一例が図1である。これは、セッション中の表現や文法などの誤りを修正して文を整えようとしている【状況】において起こりがちな【問題】と、それに対する【解決】についてまとめた「しんいの発掘」というパターンである。


<p>【パターン名】しんいの発掘</p> <p>まだ見えていない意味を丁寧に探る</p>  <p>【状況】</p> <p>セッション中、表現や文法の誤りなどを修正して文を整えようとしている。</p> <p>▼その状況において</p>	<p>【問題】</p> <p>支援者の憶測で修正してしまうと、本来書き手が書きたかったことや、言語化されていなかった真の意図が反映されない文章になってしまう。</p> <p>【解決】 ▼そこで</p> <p>意味の通りにくい文があったら、仮に意図が推測できそうだったとしても、かならず書き手本人にどういう意味だったのかを質問して確認する。口頭や言葉だけでなく、ジェスチャーや図示など可視化して丁寧に意味を共有しながら確認する。</p> <p>▼その結果</p> <p>やりとりを重ねることで、まだ言語化されきっていなかった、書き手の奥深くにキラリと光る「真意」や「深意」を掘り起こし、それをきちんと文章に反映させることができる。今の文からは見えていなかった意味が隠されていることや支援者の想像を超える発見に出会うことがたくさんある。</p>
---	--

図1 「しんいの発掘」

このように、パターン・ランゲージでは実践の中のコツや知識が言葉で説明されているため、それを読んで自分の経験と照らし合わせて考え、他者と語り合うきっかけとなる。AWSは多くの日本語教育関係者がこれまで経験してきたであろう、いわゆる添削とは異なるアプローチをとるため、新しくAWSの支援者になる人にとっては支援の方法が想像しにくく戸惑うことがある。ベテラン支援者にとっても、自身の実践を振り返り更新していくことは重要である。パターン・ランゲージを取り入れることで、AWSに対する個人の見方や考え方を言語化して他の支援者と共有しやすくなり、新人支援者にとっては、具体的な支援の様子を想像しながら、自分だったらどのように実践できるかを考える機会に、そしてベテラン支援者にとっても自身の実践を振り返り学びほぐす機会となる。また、日頃セッションの中で自分も実践していた何気ない言動の価値や意味を再発見することにもつながる。さらに、自らの実践に対する現状分析を行ったり、支援者としての成長目標を設定したりすることも容易になる。

1.3 本稿の目的

本稿では、日本語アカデミックライティング支援のためのパターン・ランゲージの作成過程に焦点を当て、例として「発想のスイッチ」というパターンが最終的にまとまるまでの過程を詳細に記述して報告する¹。筆者らがセッション場面のどのようなやりとりに着目し、重要な要素を抽出したのか、試行錯誤や紆余曲折を経たその作成過程をつぶさに公開することで、本パターン・ランゲージの信頼性を確保するとともに、今後ほかの日本語教育場面においてパターン・ランゲージの作成を目指す人の拠り所となることを期待する。

2. パターン・ランゲージを作成する

2.1 作成プロセス

パターン・ランゲージは、「良い実践をしている人たちの行動や認識・判断などを対話型・探究型のインタビューで聞き出し、類似性を見つけながら抽象度をあげていくことで、その実践知の本質を抽出して」いくものであり、「脳内にしまわれていた知が抽出され形を持つことで、実践者本人も自分の行動を客観的に語れるようになり、また他者が認識することができるようになる」(クリエイティブシフト「パターン・ランゲージとは」)²。

野澤ほか(2017)を参考にまとめると、作成の手順は大きく分けて“Pattern Mining,” “Pattern Writing,” “Pattern Symbolizing”の3つのフェーズに分かれている。まず“Pattern Mining”では、その領域での経験が豊富な実践者から対話的に経験談を聞き出し、そこで得られた大量の情報を付箋等でクラスタリングして共通パターンを見出す。そして、状況・問題・解決をひとまとまりとし、パターンの種として書き出していく。それを基に、“Pattern Writing”では、それぞれのパターンの種をより細かい形式で書き下していき、深めていく。推敲を繰り返し、パターン全体を仮組みする構造化も行いながら精緻化していく。そして最後の“Pattern Symbolizing”は、ここまでまとめてきたパターンを象徴的に表すフェーズで、パターンに名前を考えると同時に、それをヴィジュアルに表現するイラストレーティングを行う。

このような作業を通して、抽象的過ぎず具体的過ぎない、いわゆる「中空の言葉」(前出「パターン・ランゲージとは」)で実践知を描き出すことを目指す。理念やミッションのようなものは、正しくはあるが抽象的過ぎて具体のイメージがつかみにくい。一方で、具体的な行動をまとめたマニュアルのようなものは具体的過ぎてその再現にのみ力が注がれ、個人が考えて動ける余地を奪う。したがって、その間の抽象度で、多様な実現性を含みながら具体的な実践を個人が想像・創造できるような表現を見つけることが肝となる。

2.2 本研究におけるパターン・ランゲージの作成プロセス

本研究では、ベテランのAWS支援者による①模擬セッションの録画、および②そのセッションを振り返りながら支援者本人に支援上のポイントを語ってもらったインタビューの記録をデータとした。日本語教育および5年以上のAWS経験を持つ大学教員4名の現役支援者による、4セッション分のデータを使用した。使用したデータの収集期間は2020年1月-2021年1月である。1セッションは約40分間で、書き手が持参したレポート課題などの文章について、いつも通りセッションを行ってもらった模様を録画した。その後、支援者と筆者らが一緒にその録画を見ながら、セッション内で行われていたやりとりの意図や、支援上のポイントを語ってもらった。適宜、筆者らも質問を加えた。

それを基に、表1の手順で筆者ら2名でパターン・ランゲージを作成した。コロナ禍ということもあり、作業は全てオンラインで実施した。

表1 本研究におけるパターン・ランゲージ作成の手順

1) 文字化原稿と録画を見ながら、コツだと思われる部分をそれぞれ付箋に書き出す (Google Jamboard を使用) 2) それぞれが書き出した付箋を持ち寄り、Zoom 上で検討 3) 2) で検討した付箋を用いて、まずは各自で KJ 法の要領で「支援者の意図」や「コツ」の類似性からクラスタリング 4) クラスタリングした結果を持ち寄り Zoom 上で話し合い、大まかな島を決定、ラベル付け 5) それぞれの島について、状況・問題・解決をひとまとまりとしたパターンの種を書き出す	Pattern Mining
6) 5) の過程で発見した、うまくおさまらない付箋や内容が類似する島について再度 Zoom 上で話し合いを行い、整理 7) パターンの種を書き下し、文章の検討を重ねる その他のパターンとの兼ね合いも見ながら調整し、 【状況】【問題】【解決 (行動・結果)】の完成	Pattern Writing
8) パターン名の決定、およびイラストの作成	Pattern Symbolizing

このような手順で4つのセッションから抽出した「コツ」を暫定的に26のパターンにまとめ、関連性を見ながら、〈支援者の基本姿勢〉〈書き手への働きかけ〉〈雰囲気づくり・関係性〉〈セッションの組み立て〉〈対応スキル・工夫・術〉の5つに整理している (表2)。

表2 日本語アカデミックライティング支援者のための
パターン・ランゲージ (暫定版)

支援者の基本姿勢	書き手への働きかけ	雰囲気づくり・関係性
01 書き手の選択	04 しんいの発掘	10 安心して話せる場所
02 答を持っているのは 書き手	05 考える時間	11 よく聞く姿勢
03 書き手に任せる	06 クイズタイム	12 ひとときのチーム
	07 気づきへのいざない	13 ゆとりの力
	08 書き手の領域に 踏み込む	
	09 伝えると引き出すの バランス	

セッションの組み立て	対応スキル・工夫・術
14 セッションの切り盛り	21 対応の引き出し
15 スタートラインの確認	22 発想のスイッチ
16 現地の確認	23 活かす・増やす・整理する
17 ゴールの確認	24 木も見る、森も見る
18 静かなるフル稼働	25 保留の効果
19 いい塩梅の締め	26 忘れない工夫
20 まとめの時間	

次章では、この中から「22 発想のスイッチ」を取り上げ、どのような過程を経てまとまったのかをより具体的に見ていく。

3. 「発想のスイッチ」の場合：どのように抽出されたか

まずは支援上のポイントやコツと思われるものをデータから一つ一つ付箋に書き出した。たとえば、日本語の間違いが多くて申し訳ないと述べる書き手に対して、よく書けているから細かいところまで整理できるという言葉をかけるという支援者の語りや、評価が厳しい教師への愚痴をこぼす書き手とやりとりしている場面からは、「ネガティブな考え（愚痴、不満、不安）をポジティブに再解釈・言い換え、先に進めるよう後押しする」「相談者の愚痴的な話には、共感を示しつつ笑って受け止め、『今回気をつけられること』に持っていく」といったようなポイントを抜き出した。また、日本語の表現を検討している場面では、初めに浮かんだ表現以外に考えられなくなっている時に、一旦紙から顔を上げてあらためて意図を説明してもらったり、他言語であれば他にどういう表現があるかを考えてみるなどのやりとりから、「囚われている表現から離れてみる」「他言語に関する言語知識の活用」といったことを挙げた。

それらを、Jamboard を用いて KJ 法の要領でクラスタリングしたものが図2と図3で

ある。この作業はまず筆者ら2名がそれぞれ個別で行った。図2が筆者1、図3が筆者2によるものである。この段階では、両者のクラスタリングには共通点や近似性も見られるが、異なる分類をしていることがわかる。図2では、書き手の固まった見方やネガティブな反応に対する支援者の働きかけを「見方、考え方の方向転換」として一つの島に、そして、その下の「探し方いろいろ」という島には、適切な表現を探している場面で行われていたことをまとめている。図3ではそれらが同じ島に分類されていた。

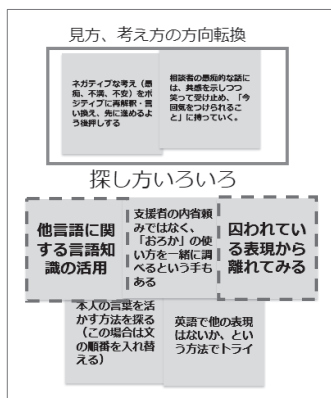


図2 筆者1のJamboard

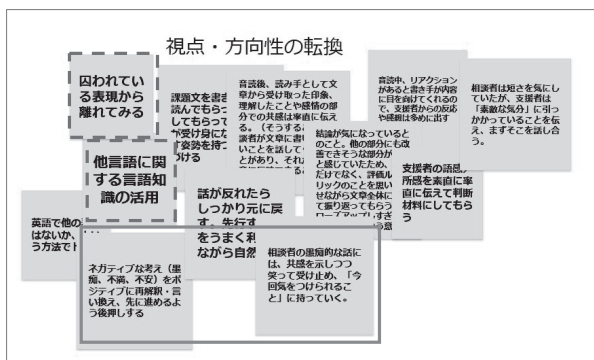


図3 筆者2のJamboard

これを基に話し合った結果、図2では上の島に置かれていた「ネガティブな考え（愚痴、不満、不安）をポジティブに再解釈・言い換え、先に進めるよう後押しする」も、下の島の「囚われている表現から離れる」も、囚われている「考え」から離れるという意味で共通点があるという考えに至った。考えであれ表現であれ、囚われている「何か」から離れるということへのアプローチには、第三者だからこそ生み出せる新たな視点や方法があり、そこには共通しているところがあると考えたからである。そこで、この4枚を同じ島にすることにした（図4）。そしてこの考えであらためて他の島や付箋を見渡して再検討した結果、もともと別の島にあった「忍耐。質問を変える」という付箋も、発想を変えるために様々な角度から質問を重ねるという点で共通点を見出し、この島に合流させることになった。

ただ、この段階では、この4枚で一つの島とするかどうかは決めきれず、「ちょっと保留、要再検討」というメモを残して引き続き考えることにした。また、この話し合いの際に出てきたキーワードは、パターン名の候補やパターンの種を書く際に使えるような言葉として近くにメモを残しておいた。

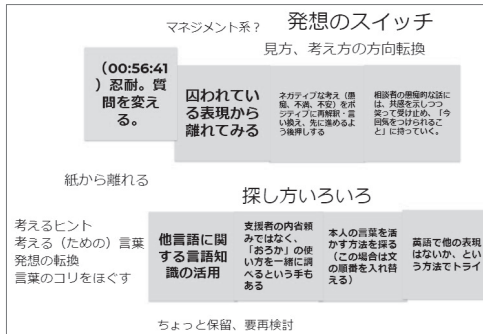


図 4 1 回目の話し合い後

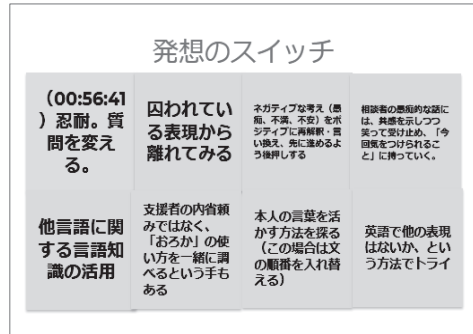


図 5 2 回目の話し合い後

その後、まずは「見方、考え方の方向転換」の島について「パターンの種」となる状況・問題・解決を文章にしてみることにした。書きながらあらためて考えたところ、「探し方いろいろ」の島にある「他言語に関する言語知識の活用」「表現の使い方を一緒に調べる」「本人の言葉を活かす方法を探る」「英語で他の表現はないかという方法でトライ」といったようなことは、見方や考え方を考える具体的な方法として、「発想のスイッチ」の島として一つに統合できるのではないかと考え、次の話し合いの機会に再検討し、統合することにした(図5)。

この変更と決定を踏まえてあらためて【状況】【問題】【解決(行動・結果)】を書き直した。この文章化の過程では、具体的過ぎず抽象的過ぎない説明の模索、他のパターンと重複した説明は文言を修正するなど、二人の目でレビューしながら改稿を重ねた。最終的にパターン名とイラストをつけて完成したものが図6である。イラストでは、支援者は、自分だけでは堂々巡りをしてしまう書き手のそばで、「発想をスイッチ」させる役割であることを示している。


<p>【パターン名】 発想のスイッチ</p> <p>一人では前向きな解決策が見出せないとき</p>  <p>【状況】 一つの案や考え方に囚われてしまい、視野が狭くなっている</p> <p>▼その状況において</p>	<p>【問題】 なかなか良い解決策が見つけれず焦ってしまうと、余計に柔軟な発想ができなくなってしまう。そこから抜け出せない。</p> <p>【解決】 ▼そこで 支援者は冷静な他者であることを生かし、書き手の話を聞き、それを受け止めながらも発想の転換をサポートする。たとえば、過去の失敗や苦手なことは「今回気をつけられること」として再解釈してみる。また、表現探して堂々巡りしている時は「一旦文章から離れてみましょうか」と提案したりする。どういことを表現したかったのかを口頭で説明し直したり、母語や他言語だと他にどういう表現があるのかを調べたりする。</p> <p>▼その結果 支援者という客観的な視点を入れて問題を見つめ直し、囚われていた表現や考えから一旦距離を取ることで、新しい発想や適切な表現に出会える。その過程で試した新しい案を探す方法や新しい考え方が書き手の引き出しにもなり、その後は自分で「スイッチの切り替え」が少しずつできるようになる。</p>
--	---

図6 「発想のスイッチ」の完成

4. おわりに

このように、セッションでの書き手と支援者のやりとりからポイントを書き出し、丁寧に言語化しながら、セッションや支援者の垣根を越えて整理し、さらに幾重にも話し合いや文章化を繰り返してようやく一つのパターンができあがっている。これにより、筆者ら自身も明確に自覚していなかった深層の思考や思いを掘り起こすことにつながると共に、属人性を排除し適用範囲を広げ、誰でもここから実践へのヒントが得られるような形となった。このようなプロセスを経て、日本語アカデミックライティング支援者のためのパターン・ランゲージはまとめられており、その共有によって、同じく支援に関わる人が自分の実践や経験を振り返り、考え、更新していく機会となるものを目指している。

今回は分野横断的で汎用的なアカデミックライティング支援の実践知に関するパターン・ランゲージを目指しているが、こうした手順がわかれば、それぞれの現場や特定の

分野に求められる実践知をその実践者がパターン・ランゲージとしてまとめることもできる。パターン・ランゲージの活用や作成を通して、こうした実践知を広く共有できれば、実践者本人はもちろん、実践に関わる全ての人がその恩恵にあずかることができる。その端緒となることを願い、本報告にまとめた。

暫定版として示した本パターン・ランゲージは作成途上にある。今後、全てのセッションデータからパターンを抽出し、出揃ったところで再度全体の体系化を行い、完成させる予定である。

付記

本研究は JSPS 科研費 19K00742 による成果の一部である。

注

1. 本稿は、2021年8月6日に開催された第3回シンポジウム「未来志向の日本語教育」において筆者らが発表した内容に加筆修正を加えたものである。
2. <https://creativeshift.co.jp/pattern-lang/> (閲覧日: 2021年8月3日)
パターン・ランゲージについての詳細は本サイトを参照されたい。

参考文献

- 井庭崇編著 (2019) 『クリエイティブ・ラーニング：創造社会の学びと教育』慶應義塾大学出版会
- 楠見孝 (2012) 「第1章 実践知と熟達者とは」金井壽宏・楠見孝編『実践知－エキスパートの知性』有斐閣：3-31
- 黒田史彦・大森優 (2021) 「日本語アカデミックライティング支援者のためのパターン・ランゲージに関する探索的研究」『日本語教育方法研究会誌』Vol.27, No.1: 98-99
- 野澤祥子・井庭崇・天野美和子・若林陽子・宮田まり子・秋田喜代美 (2017) 「保育者の実践知を可視化・共有化する方法としての『パターン・ランゲージ』の可能性」『東京大学大学院教育学研究科紀要』Vol.57: 419-449